

体験を  
愉しみながら  
責任を全うする



# 春風亭 昇太

巻頭  
インタビュー

落語家

●巻頭インタビュー	2
●そこが知りたい! 暮らしの金融知識 離れて暮らす親の介護を 考える	6
●連載エッセイ —会計士のやさしいお金のお話— 〈第6回〉あなたの知らない 消費税	11
●まんが わたしはダメサレナイ!! 「サクラサイト」の メール交換詐欺	14
●ひとり立ち生活、ここがポイント クレジットカードの基礎知識	17
●委員団体の活動紹介 一般社団法人信託協会 一般社団法人全国信用組合中央協会	18
●たべもの百面相 カレー	20
●働く人のライフ&マネープラン 出産・育児にかかる費用	22
●金融教育の現場レポート 大学の教職課程における 「金融教育」の指導法	24
●衣・食・住・遊 あの時代この時代 〈第2回〉食 学校給食の移り変わり	28
●知るぼるとラウンジ 都道府県金融広報委員会 事務局員の活動紹介 金融広報アドバイザーの紹介	30
●知るぼるとホームページ ピックアップ!	32
●おたよりコーナー	33
●都道府県金融広報委員会一瞥	34
●知るぼると最前線 金融教育公開授業	35

昨今の落語ブームの中、  
古典落語のほか数々の新作落語でも  
人々を魅了し、

幅広い世代に落語の素晴らしさを  
発信し続ける春風亭昇太師匠。  
活躍の舞台は、高座はもちろん、  
テレビや芝居にも広がり、  
さらにその趣味の多彩さも  
よく知られています。

今回は、落語界のニューリーダー的  
存在として輝きながら、  
さまざまに分野で意欲的に活動する  
落語家 春風亭昇太師匠に、  
人生を有意義に過ごしていくうえで  
信条を伺いました。



●春風亭 昇太(しゅんぷうてい・しゅうた)

1959年静岡県生まれ。82年春風亭柳昇(入門、前座名は昇八。86年二ツ目昇進、春風亭昇太となる。92年席亭推薦による抜擢で真打ち昇進。定期的に発表する新作落語の創作活動「SWA」(創作話芸アンシエーション)を経て、独自の現代的な解釈で落語に取り組む。さらに演劇への出演も多く役者としても活躍し、音楽系の人たちとのライブも意欲的に行うなどジャンルを越えた交流も幅広い。趣味は城郭見学、浮世絵、旅行。(社)落語芸術協会理事、日本演芸家連合理事。

## 決して後悔したくない。 だから好きな世界に飛び込んだ

寄席から寄席への移動中に取材場所に駆けつけていただいた春風亭昇太さん。おしゃれな帽子とカジュアルな服装が良く似合っている。ちょっとした時間も自分のスタイルにこだわりを持つ昇太さんらしさがその身なりからも伝わってきた。

かつては一部の根強いファンを中心に愛されてきた落語。しかし今では若い女性などへも人気広がりが、落語はずいぶん身近な存在になった。その牽引役として活躍している昇太さんに、まずは落語の魅力を伺った。

「何よりも演じ手によって、聞き手の想像力が自由自在、無限に広がっていくことですね。たとえば私が絶世の美女と言えば、聞いている皆さんは、それぞれが一番美しいと思う女性をイメージするわけです。いわば演じ手が伝えたいことと聞き手が想像するイメージが渾然一体となり、その場で作られていく面白さを持つのが落語だと思います」と昇太さん。もちろんテレビで観るのも悪くはないが、やはりお勧めは、演じ手と聞き手が一体となる寄席や独演会など生の臨場感を味わうことだと話す。

その昇太さん、少年時代から落語好きだったわけではない。落語好きの兄がラジオでときどき落語を聞いていたが、昇太さんはまったく見向きもしなかったと言う。どちらかといえばお年寄りだ

けの趣味と感じ、避けていたのだ。

落語を始めるきっかけは、大学1年のときに訪れる。ある別のサークルに興味を持ち、部室に行ってみてみたが、誰もいない。そのとき「帰ってくるまで隣にあるうちの部室で待ってれば」と声をかけてくれたのが、落語研究会の人だった。その際に垣間みた稽古が意外に面白く、軽い気持ちで昇太さんは入部。その後、先輩に連れられ初めて行った演芸場で転機が訪れる。高座には当時二ツ目の春風亭小朝。真打前から天才といわれた落語家の嘶を生で聞いた昇太さんはいたく感動。子どものころから抱いていた落語のイメージが大きく変わった。このころから落研でも発表会などを通じ、自分が演じることでも人を笑わせる楽しさも体験していった。

その後、昇太さんの才能は急速に花開くことになる。大学2年のときにTV番組が主催する学生落語選手権で優勝したり、漫才コンビでも演芸番組の勝ち抜き戦で初代グラントチャンピオンに輝くなど、大学以外の場でも実力が認められ始めていた。

そんな経験を積み重ね、プロの落語家になることを決意した昇太さんは大学を4年で中退する。しかし、そこに悲壮感のようなものはなかった。当時はバブル時代。就職も売り手市場であり、仮に落語家になれなかったとしても十分にやり直せると昇太さんは思っていた。

「好きな世界に飛び込むことをしないまま過ご

し、年を重ねてから『本当は落語家になりたかった』と悔やむ人生だけは送りたくありませんでした」と昇太さんは振り返る。自分で自分の生き方を見て、納得することができるかどうか。そんな物差しを持っていた。

## 落語家として勉強していく大事さを 教えてくれた師匠

落語家になることを決心した昇太さんには、教えを乞いたい落語家があった。それは5代目春風亭柳昇師匠。以前から何度も足を運んで生の落語を聞いた落語家だった。聞くたびに惹かれたのはその不思議な芸風。何が面白いのかつかめないまま、気がつくとなんか引込まれ、いつしか笑いが止まらなくなっている。そんな芸の深さに心から感動した。そして昇太さんは、ついに柳昇師匠の門を叩いた。

弟子となった昇太さんは、毎日柳昇師匠のお宅に通い、掃除など身の回りの雑用にも取り組んだ。いわゆる下積み時代の厳しい修行時代を昇太さんも当初は想像し、当然のことと思っていた。

しかし、ある日師匠から掃除などはもういいと告げられる。

「師匠からは『そんな時間があったら芝居や映画を見なさい』と言われました。修行だから師匠の身の回りをお世話するといった形式にこだわらず、落語家として成長していくために身に付けなければいけないことを自由にやらせてくれた師匠

の心に、改めて感動したのを覚えています。ただし、ずっと経ってからそのことを師匠に話したら、いちいち掃除を頼むのが面倒だったとおっしゃっていました（笑）」と昇太さん。

そういった師匠の思いに応えるよう、昇太さんは、稽古や勉強にも懸命に取り組んでいく。そしてその努力は着実に実を結んでいった。二ツ目時代から演芸番組の司会に抜擢されるなどテレビ番組に多数出演。新作落語の名手と謳われていた柳昇師匠に大いに影響を受け、自らも数多くのオリジナル落語を創作し、それが脚光を浴びていく。1989年にはNHKで開催された新人演芸コンクールで優秀賞を受賞。1992年には落語の世界では最も高い肩書とされる真打ちに7人抜きで昇進を果たしていく。さらに2000年には国立演芸場花形演芸大賞と文化庁芸術祭大賞を受賞。現在は弟子の育成にも力を注ぎ、落語界に確かな地位を築いている。

## 趣味も人生も体験しないと 分からないものがある

落語家 春風亭昇太を語るキーワードの一つは新作落語。そこに力を注ぐ思いを昇太さんはこう語る。

「古典落語には歴史が積み重ねられた独特の味わいがありますが、新作落語では、古典では表現しきれない今の世界を描きます。音楽に喩えるなら古典はスタンダードナンバーで、新作は自分が

創って自分で演じる分、シンガーソングライターに近いかも知れませんが、けれどそんな新作も、自分が実際にやってみるまでは、ここまで面白くなるとは思っていませんでした。自分でストーリーを練ったりギャグを入れていく、さらに自分で演じる方を考え、まったく聞いたことのない人たちにそれを話していくという新鮮な体験は、新作を作り始める前に想像していたものとはまったく違っていました。落語が作られていく、高座でそれを体験して、初めて分かりました」

そんな言葉に表れているように、昇太さんが古典のほかに新作にも意欲的なのは「どんなこともまずやってみよう」という思いがあるからだ。そしてそのエネルギーが数々の新作落語を生み出した。それは落語だけではない。「とにかく動いて、経験してみる」という姿勢は、昇太さんの生き方の基本となっている。

それを芽生えさせたのは小学生のときに体験したクラスメイトの死という悲しい出来事だと言う。悲しさはもちろんあった。しかし、それ以上に小学生の昇太さんの心に刻まれたのは、生きることの尊さだった。こうした体験をきっかけとして「一瞬一瞬を有意義に生きよう」と常に心掛けるようになり、「まず体験してみること」が昇太さんの信条になった。

行動すると必ず何かが起こる。だから昇太さんは、本を購入するのもネットショッピングを使わず、時間が許す限り書店に足を運び、探す。する

とときには探していた本の隣に、思いがけなく素晴らしい本が並んでいたりする。

「動くこと、体験してみることが一生に関わる素晴らしい出会いをつくることがあります。私と落語の出会いも、隣にあった素晴らしい一冊の本のようなものかも知れません」

そんな昇太さんだからかもしれないが、趣味が多様なことでも有名だ。自宅にはブラウン管式のテレビや蓄音機など、レトログッズを集めた昭和の部屋があつたりする一方、お城めぐりにも凝り、その魅力を紹介する本まで書いてしまった。

ほかにも料理や車、ペットなど枚挙にいとまはないが、さらに最近は芸人仲間の勧めもあつてボクシングを習い始めた。特に興味があつたわけではない。このときにもほかの趣味と同じように、まず体験してみる、という昇太さんの基本行動が現れた。今ではボクシングも大切な趣味の一つとして続いているという。

## 人間として責任を持つこと。 それが生きる力に

昇太さんにはお金について小学生時代に忘れられない思い出がある。

「それまでは毎日20円のお小遣いを貰っていたのですが、兄がまとめて1週間分貰っていたので自分もそうしたいと両親に言ったのです。その願いは叶えてくれましたが、貰ったその日に全額お菓子代に遣ってしまいました。そのときの両親と兄



## 春風亭昇太 インタビュー

のがっかりした顔を今でも忘れられません。まるでコントのように3人同時にうなだれていました」と笑う昇太さん。さらに修行時代に柳昇師匠から受けたアドバイスも心に刻んでいる。

師である柳昇師匠は「落語家の生活は不安定な仕事だ。どんなに少しずつでもいいから、しっかり貯金は続けるように」と機会があることに繰り返し返していた。

落語家といえは「破天荒な暮らしも芸の肥やし」

といった生き方をイメージする人も多いかもしれない。しかし決してそうではないことを昇太さんは師匠の教えから知った。子ども時代のお菓子の失敗談と師匠の指導が今の昇太さんに堅実な金銭感覚を形成させた。

落語ではお金にだらしない人物が数多く登場する。たとえば比較的よく知られている「時そば」(上方落語では「時うどん」)。お金のない二人組が蕎麦屋の屋台に入り、蕎麦をすすする。食べ終えて蕎麦の代金を小銭で払うときに一人が店主に時間を聞き、その数字も勘定に入れて見事にごまかす。それに感心したもう一人が別の蕎麦屋で真似をし、時間を聞く。しかし前に成功したときは時間が違うため、逆に損をする。お金をごまかすずるさや、それを真似て失敗する滑稽さが笑いを誘う一席だ。

「こうした落語を楽しむ人は、お金に関する反面教師として聞いてほしい」と昇太さんは念を押す。

インタビューの最後に昇太さんにとっての生きる力を伺った。お金も仕事も「人間として責任を持つ」ことと答えてくれた。責任を全うし、世間に顔向けできるようがんばり抜くことが、困難を乗り越えていく自分の力になっていこう。一瞬きりつとした表情になる昇太さん。けれどすぐに柔和な笑顔に戻り、「でもあくまでもほどほどに」と付け加えた。肩に力を入れず、それでいて逞しく生きる気鋭の落語家らしさがそこにあつた。